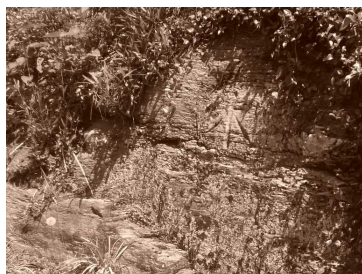


今回公開する「自然災害伝承碑」の代表事例

洪水
(埼玉県長瀬町)



寛保2年(1742)、4昼夜降り続いた豪雨により荒川が氾濫し、この付近一帯はことごとく水没した。後日、地元の有志2人が当時の水位を岩肌に「水」の文字で刻んだ。そのほかにも文字が刻まれていたが、現在は大きい「水」の字以外は判読が困難である。

洪水
(宮崎県延岡市)



平成9年(1997)9月16日、台風19号の洪水の被害は、日中にもかかわらず尊い人命1人を失い、土地、家屋、機械器材等を合わせ55億円を上回る大損害となった。

地震
(東京都新宿区)



大正12年(1923)9月1日に発生した関東大震災を記憶に留めるため、当時の東京市四谷区内の新聞社を発起人に、四谷区の議会・町会・商業組合等103の賛助者・団体により建立された。「大震災記念碑」の書は当時の増上寺法主による。

地震
(兵庫県豊岡市)



大正14年(1925)5月23日に発生した北但馬地震(北但大震災)により港村田結では83戸中82戸が全半壊し、村民65人がその下敷きになった。直ぐに火が燃え上がったが、村民が消火を優先して延焼を食い止め、消火後に58人を救助した。

土砂災害
(山形県真室川町)



昭和50年(1975)8月6日、鮭川上流域の集中豪雨により真室川の堤防が決壊し、大滝地区では土石流が発生した。死者4人、行方不明者1人、家屋全壊53戸、床上浸水331戸、耕地等の冠水は3,407haに及んだ。

土砂災害
(鹿児島県始良市)



平成5年(1993)8月1日、梅雨前線や台風による記録的な集中豪雨により、始良市触田地区のシラス斜面が高さ40m、長さ1.5kmに渡って崩壊、多量の土砂や流木が流出し、下流域の人家や耕地に被害を与えた。

地震・津波
(北海道奥尻町)



1993年7月12日午後10時17分に発生した北海道南西沖地震はマグニチュード7.8と日本海では観測史上最大級で、激しい地震の数分後に大津波が押し寄せた。奥尻町では地震・津波・火災により198名の尊い命が犠牲となった。碑の土台は押し寄せた津波と同じ高さまで盛土されている。

津波
(島根県益田市)



万寿3年(1026)、地震による大津波で高津沖にあった鴨島が水没するなど大きな被害を被った。